



神聖かまってちゃんと庵野秀明

本文抜文

「“四年間は壊れたまま何もできなかった” 庵野秀明は監督を務めた前作（不思議の海野ナディア）から『新世紀エヴァンゲリオン』が放送される四年間を回想してそう語っている。（略）庵野はアニメ視聴者を敵に回すようなことをアニメで行った。アニメばかり観てただの消費者になるなよと言い切った。神聖かまってちゃんは一般の音楽リスナーを敵に回すようなことを音楽で行った。誰も言い切れないような《死ね！》を言い切った。これがロックンロールだ。これをやらずに何がロックンロールなんだろう、とぼくは思う」

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、庵野秀明の『新世紀エヴァンゲリオン』のTVアニメ後半の崩壊を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

【の子（神聖かまってちゃん）と庵野秀
明、魂を獲得したけもの】
——ハッピーエンドを放棄することは

「四年間は壊れたまま何もできなかった」

庵野秀明は監督を務めた前作のアニメから『新世紀エヴァンゲリオン』が放送される四年間をそう語っている。

四年間は壊れたまま何もできなかった。

庵野秀明は監督を務めた前作のアニメ（不思議の海野ナディア）から『新世紀エヴァンゲリオン』が放送される四年間を回想してそう語っている。



アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』は庵野秀明の監督作品である。九五年にテレビで放映された。

内容は、二〇一五年の第三東京市を舞台に、謎の敵が襲来し、謎のロボットで撃退していく物語である。

シリーズ前半、作品は、ほぼよくできたSFアニメとして進行する。基本的には、敵の襲来とその撃退に登場人物たちのエピソードが絡むオーソドックスなものだ。

エピソードは単純である。この時期はコミカルなシーンやテレビアニメによくあるデフォルメ表現も多く、視聴者は「お約束」を裏切られることはない。



しかし、、、 ↓

後半、庵野は救済の物語、ハッピーエンドを突然放棄し始める。



各エピソードは突然凄惨さを増す。

作品は、安易な逃げ道を封じたシリアスな物語に展開する。ある者は不具になり、ある者は精神を犯され廃人になり、ある者は黒コゲの焼死体となってしまう。驚くべきは、彼らはシリーズ前半でコミカルなシーンを演じていた登場人物たちなのだ。とても衝撃的だった。

親しみのあるキャラクターが涙を流し、絶叫しながら、身体的にも精神的にも崩壊していく。↓

斬新なカットとカメラワーク、演出で魅せてきたのが『新世紀エヴァンゲリオン』だった。

驚くべきは、キャラクターが墮ちるその瞬間いずれのシーンにも変に演出をせず、逃げることなく、あえて言うなら真っ当に人間の崩壊を描いたことだ。

物語上、退場するキャラクターはどのアニメにも存在する。とくに、味方を退場させる場合は、ハッピーエンドに至るゴールでエモーショナルさを増すためにコマを切る。

しかし、物語後半、登場人物たちは視聴者が期待するハッピーエンド（ゴール）を放棄するようにそれぞれの意志で動いていく。

登場人物たちは視聴者が期待するハッピーエンド（ゴール）を放棄するようにそれぞれの意志で動いていく。

作戦指揮官のミサトは組織の謎を追う。

EVA弐号機パイロットのアスカは自分のアイデンティティを守ることに固執する。

EVA零号機パイロットのレイは不可解な行動をとる。

主人公である内気なシンジは戦うことを拒否する。

それは、アニメがただの娯楽の装置ではないと視聴者に示したかったのだ。

人は自分の思い描いた人生通りに歩めるわけではない。

予想に反して退場する人間もいる。

アニメという物語で、キャラクターをストーリー上の必要死ではなく、個人が行動した結果起こった不必要な死にすることで、視聴者に現実を想起させるようにしたかったのではないか。

なぜ(庵野は)そんなことをしようと思ったのだろう。

答えはひとつしかない。アニメの視聴者のことが嫌になったからだろう。

例えば、テレビに出ているJ-POPグループたちは相変わらず「好きだ」「愛してる」「守りたい」を歌う。こういうものを好んでいるリスナーは驚くほどこれら「お約束」の言葉が好きだ。いろんな歌手たちが姿形を変えてほぼ同じ歌を歌う。それが何度も反復されていることにリスナーの彼ら（彼女ら）は気づいているはずだ。でも、そういう言葉が入った歌が飽きることなく好きだ。

これは、「お約束」を望むアニメ視聴者と重なる。

↓

JAPAN読者なら分かると思うが、そういうお約束の言葉は好かない。人生は、世の中は、恋愛だけではないからだ。ぼくらはそれを知っている。だから、物足りないし、現実を想起させる歌を聴きたくなる。

J-POP歌手たちが歌うお約束の言葉ばかりの曲を望んで聴いてる人たちに、現実を想起させる歌を聴かせたくなる。それは嫌がらせだ。でも、そもそもロックとは世間への嫌がらせだ。自分の思いを相手にぶつけるのだから迷惑極まりない。

現実を想起させる歌を聴かせたくなる。それは嫌がらせだ。でも、そもそもロックとは世間への嫌がらせだ。自分の思いを相手にぶつけるのだから迷惑極まりない。

庵野は視聴者に対してシリーズ前半、アニメ視聴者が喜ぶ「お約束」を数多く行った。緊迫のバトルシーン、メカデザイン、ミリタリー兵器、美少女キャラクター、三角関係、コミカルな掛け合い、どれも高水準だった。予告においてナレーションで「サービス、サービス」という言葉が入るのが象徴的だ。

視聴者の望むお約束を提供し続け、それを脇目もふらず消費していく視聴者に庵野監督はうんざりしたんだろう。愛されていたキャラクターたちを絶叫させ、苦しめて、物語は収集がついてない状態で幕を閉じる。

視聴者の望むお約束を提供し続け、それを脇目もふらず消費していく視聴者に庵野監督はうんざりしたんだろう。愛されていたキャラクターたちを絶叫させ、苦しめて、物語は収集がついてない状態で幕を閉じる。

実際は、ぼくが出てしゃべってもよかったんです。それでもいけるはずだったけど、さすがに拒否された。セル画でない部分、絵コンテの絵をそのまま使ったのは、ワザとです。間に合わなかったとか、そういう問題じゃない。とにかく、セルアニメーションからの開放をめざしたんです。ただの記号論なんですよ、セルなんて。マーカーでアスカの絵が書いてあって、そこから宮村優子の声がすれば、もう十二分にアスカなんですよ。セルにこだわること自体が嫌になったんです。かといって別にCGに行くということではない。[中略] [セル画を要求するアニメファンは]フェティシズムにまで行ってしまっている。

(庵野秀明：『ニュータイプ』九六年六月号、角川書店)

庵野はぶちまけた。

アニメなんてこんなもんだ、アニメという枠の中にいつまでもいるかぎりお前らはアニメ関係者の都合の良いただの消費者になるぞ。だから俺がキャラクターを殺す、物語を壊す。ほら、どうだ？と作品で訴えているようだ。枠の中でぬくぬく楽しんでいるオタクにそのままではだめだぞ、と突きつけた。破壊の果ての救済だ。

枠の中でぬくぬく楽しんでいるオタクにそのままではだめだぞ、と突きつけた。破壊の果ての救済だ。

さて、マスに向けたJ-POPの歌を好んで聴いてるリスナーの話をする。

好きだ・愛してる、を必要以上に繰り返かえす歌が大好きな奴らがいる。しかし、「慰めされました」「勇気が出ました」と言ってしまうそのリスナーたちは、その枠のなかにいる限り永遠に恋愛で傷つきつづけ、本当の意味で救われることはない。救済されているようで実はされていないのだ。

とうのJ-POP歌手たちはそれに自覚的だ。恋愛ソングを繰り返し繰り返し作りつづけ、そのリスナーをただの消費者としていつまでも囲っているからだ。彼らが本当に歌うべきは恋愛は素晴らしいという歌ではなくて、「恋愛よりも素晴らしいものがこの世の中にたくさんある」ということではないだろうか。恋愛の枠から解き放つことこそが恋愛に傷ついたその人を救うことになるだろう。恋愛ソングを歌ってる歌手は恋愛以外に素晴らしいものを見つけたからこそ歌手をやっているのではないのか。なぜそれを言わないのだ。

神聖かまってちゃんの歌は自傷だ。

しかし、自傷による「救済」だ。カースト上位者からしたらただ死にたい・死ねと聞こえるだけで不快なだけだろう。そういう言葉や意思をもつことについて「淋しいことだね」「おろかしいよね」「人生って素晴らしいよね」と言い切れる人にとっては、面白いものではないだろう。の子の絶叫はぼくたちの言葉だ。愛している・好きだ、という言葉を探しているリスナーにむかってヌルい言葉は使わない。これしかない！というような決定的な言葉「死ね！」によって、リスナーを救済している。

誰もが思うその憎しみの感情をいままで誰も歌でハッキリと言い切らなかったことは神聖かまってちゃん出現後の今にして思えば驚きだ。



事実をありのまま言い切ることは簡単なようで難しい。ロッキングオン創刊にも影響を与えた思想家の吉本隆明は事実を言うことについて著書で書いている。

要約するとこうだ。戦時中に人間魚雷の隊にいた人と話をした。真珠湾攻撃の時に、特攻で、二人乗りの魚雷で突っ込んだ人たちがいた。当時、特攻魚雷の「九勇士」というのが新聞などでも英雄として紹介されていた。しかし、二人乗りで五隻なのだから、ほんとうなら「一〇勇士」となるはず。一隻には隊長が一人で乗っていたのかな、というくらいに思っていたが、その人によれば、一隻だけ浅瀬に乗り上げて、乗っていたうちの一人が捕虜になってしまったという。いまだったら「仕方ないじゃないか」ということになるが、当時は捕虜として生き残るのは恥で、帰ってきても村八分。終戦後二、三年たってほとぼりがさめた頃にひっそり戻ってきたらしい。こうした事実を知っている戦中派の作家がいるにもかかわらず、それを書かないのはなぜだということをその人は言っていたそうだ。それを書けないのならば、文学というのはいったい何なのかと。

こうした事実を知っている戦中派の作家がいるにもかかわらず、それを書かないのはなぜだということその人は言っていたそうだ。それを書けないのならば、文学というのはいったい何なのかと。

庵野はアニメ視聴者を敵に回すようなことをアニメで行った。アニメばかり観てただの消費者になるなよと言い切った。

神聖かまってちゃん是一般の音楽リスナーを敵に回すようなことを音楽で行った。誰も言い切れないような「死ね！」を言い切った。

これがロックンロールだ。これをやらずに何がロックンロールなんだろう、とぼくは思う。

——紙面が尽きた。最後に吉本隆明の言葉を引用しようと思う。文学とは何かについて語っている。

事実を覆っている膜を覆っている膜をもう一枚だけめくってみれば、すべてが出てくるのに、その一枚をめくるということが、小説家にはなかなかできないというか、やらないんですね。全部めくって取っ払ってしまえば、いちばん風が通るということはわかっているのに、かならず何枚か、または一枚だけ、膜を残したままにしている。

(中略) いいから全部取っ払ってしまえよ、と言いたいんですが、文学というのはまだまだ、そこがやれていない。特に日本の文学はそうです。たぶんそこが、文学の難所なのでしょう。いちばん重たい経験は、そう簡単には書けないということなのでしょう。でも、その難所で引っかかっていたら、いつまでもちっとも具体的にならなくて、一番大事なところの周りをただぐるぐる回っている、というようになりかねないと思います。簡単には書けないんだよ、ということを知った上で、それでもぼくは、全部取っ払って、ぶちまけるのが文学のはずだと言ってしまうと思うのです。

(吉本隆明：『超恋愛論』大和書房)